

私の一冊

歯科衛生学科 千綿かおる 先生

トーマス・J・キャロル著 『失明』

小鹿図書館 : 369.275/C 22 (日本盲人福祉委員会)

私の障害観を決定した一冊を紹介したいと思う。「障害」のとらえ方は多様であり、医療、福祉、教育等々分野によっても異なっている。私は医療分野から「障害」に長く関わってきたが、大学院の「視覚障害心理リハビリテーション」の講義で教材として使用されたトーマス・J・キャロルの「失明」が私の障害観を変えた。

表紙に『BLINDNESS WHAT IT IS, WHAT IT DOES AND HOW TO LIVE WITH IT: 失明とは何か、失明により何が起こるか、失明に対して何をすべきか』と書かれている。作者のキャロルは宗教家であるが、米国のセントポール失明者リハビリテーションセンターの創設者である。失明者の福祉およびリハビリテーションにおいて多くの業績を残した人である。

この本は、失明者と失明者を援助する人のために書かれた実務手引きである。しかし、失明者に幸福感を与えたり、失明者の支援をする人を賞賛しようというのではなく、失明者を激励し、将来に向かって努力させようとするのがねらいである。失明という現実の中で、独立し、社会的に責任を果たすことができるよう必要な技術や方法を提示している。さらに失明者だけではなく、その家族、学校、教員、医療者、福祉関係者、関連施設の人への参考図書とし、特に中途失明者について取り上げている本である。

この本には、前半に失明による「20の喪失」、後半に「20の喪失」についての機能回復とリハビリテーションについて各論が述べられている。「20の喪失」とは、心理的安定の基本的な喪失に関しては①身体的な完全さ②残存感覚に対する自信③環境との現実的な接触能力④視覚的背景⑤光の喪失、基本的技術の喪失に関しては⑥移動能力⑦日常生活技術の喪失、意志伝達能力の喪失に関しては⑧文章による意志伝達能力⑨会話による意志伝達能力⑩情報とその動きを知る力の喪失、鑑賞力の喪失に関しては⑪楽しみを感じる力⑫美の鑑賞力の喪失、職業、経済的安定に関する喪失に関しては⑬レクリエーション⑭経験、就職の機会等⑮経済的安定の喪失、結果として全人的に生じる喪失に関しては、⑯独立心⑰人並みの社会的存在であること⑱めだたない存在であること⑲自己評価⑳全人格構造の喪失の20項目について述べられている。

しかし、失明者にとって衝撃的な事は、この「20の喪失」よりも周りの人の自分の失明に対

する反応であると言われている。失明により視覚機能の障害は当然あるが、失明者自身の人格的変化があるわけではない。しかしながら、周りの人の「失明者への思い」は、その人自身の失明者や障害者に対する意識が根本に存在し、身近な人が同じ状態になった時に意識上にあがると言われている。

私が障害者歯科分野を学び始めた頃、「何かしてあげたい」「同等な対応」をしようと考え、その根底には「同情すべき人」としての障害観や、障害を改善しようとする医学モデルのとらえ方があった。障害によって困難になった部分に対して関わり、できない事の改善を目指していた。この「失明」の「20 の喪失」を一つ一つ考えた時、失明者が視覚的には見えなくても、その情景は聴覚的に聞くことができることや、感じることを知った。さらに生きる力、生活能力、知的能力等々において今までとなんら変わることがないことを理解した。その人がどのように生きていきたいのか、そのためには周囲がどのように変わらなければならないのかを理解することこそが必要であると感じた。

対人関係に関わる医療や福祉関係の学生には是非読んで欲しい一冊である。障害者、高齢者、病気の方など弱者と捉えがちな人に対してどのように関わるべきか参考になる本であると思う。